

元治元年

禁門の変の記録

永代家老益田氏家臣俣賀又助「御進発道中日記其外小遣入用控」

目次

目次	1
解説	1
益田隊の進軍・撤退経路図	3
京師変動京都市街焼失図（毛利家文庫）	4
凡例	5
御進発道中日記其外小遣入用控	6

解説

「御進発道中日記其外小遣入用控」は、元治元年（一八六四）七月十九日、京都における禁門の変（蛤御門の変）を経験した長州藩永代家老益田家臣・俣賀又助（致事）が記したものである。毛利家文庫「股賀又助御奏者番致事記録」（71藩臣日記60）に含まれる一冊である。記主俣賀又助は、益田家中の上級家臣（上士）である。主君益田右衛門介（親施）に従い、益田隊の一員として七月二日に本拠須佐を發つて上京し、禁門の変を経験した。「御進発道中日記其外小遣入用控」は、七月二日の須佐発に始まり、京都滞陣、禁門の変での戦闘、撤退、そののち二十六日に周防国室津に帰り着くまでを記した日記部分と、その間の金銭出納簿部分からなる。

禁門の変前後の状況について簡単に触れておく。文久三年（一八六三）八月十八日の政変により京都での勢力を失った長州藩は、勢力挽回のため、翌元治元年六月、世子毛利定広（元徳）および福原越後、国司信濃、益田右衛門介三家老の上京を決定する。六月末より伏見、山崎、嵯峨などに軍を駐屯させ、会津・桑名・薩摩など京都警備の諸藩とにらみ合いを続けたが、七月十九日、ついに両者の間で戦闘が始まった。勝敗は一日で決し、長州藩上京軍の中心、来島又兵衛、久坂玄瑞、真木和泉らが戦死し、三家老は敗軍をまとめ帰国せざるを得なかった。

「御進発道中日記其外小遣入用控」によれば、益田隊は七月二日に本拠須佐を発ち、萩、山口を通って六日に三田尻着、翌七日同地を船で発って海路東へと向かう。十三日に兵庫に着き、十四日に京都石清水八幡宮に本陣を置いた。十八日、隊は山崎へ移動し、天王山の宝（たから）寺を本陣とする。十九日九ツ時に戦闘が始まると、俣賀も斥候に出ている。その後の戦闘状況もくわしく記されているが、なかでも、久坂玄瑞が鷹司邸で銃撃を受け嘆願の願い叶わず切腹した様子に関する記述が注目される。おそらく、久坂の最期を記述した史料としてはこれまで知られていなかったものである

敗色が濃くなり、隊は京都からの撤退を決める。退路途中、西宮で姫路藩兵三〇〇名に出会ったが、鳥取藩兵と偽り無事通行したという生々しい記述もある。兵庫からは船で西に向かう。往きには各地に上陸しながらの進軍であったが、敗軍となった帰りは、輓など一部に立ち寄るのみで船路を急いでいる。二十六日、周防国室津に帰り着いている。

本文書は、益田家家臣の目をととして見た禁門の変の記録として重要性をもつものである。

なお、平成26年度古文書実践講座において、安政元年（一八五四）、俣賀がペリー来航後の相州警備に参加した際の様子を記録した日記「道中日記并小遣諸控」を解説している。

本テキストは、実践講座経験者を中心とする古文書解読自主グループ「けやきの会」が平成27年度に解読した。会のメンバーは左記のとおり。

久保田有香・森重由祁子・三好能子・上田蕃穂・山本節子・井本澄江・高田美智子

〈サポート〉山崎一郎・山本明史・吉積久年（山口県文書館）



「御進発道中日記其外小遣入用控」表紙

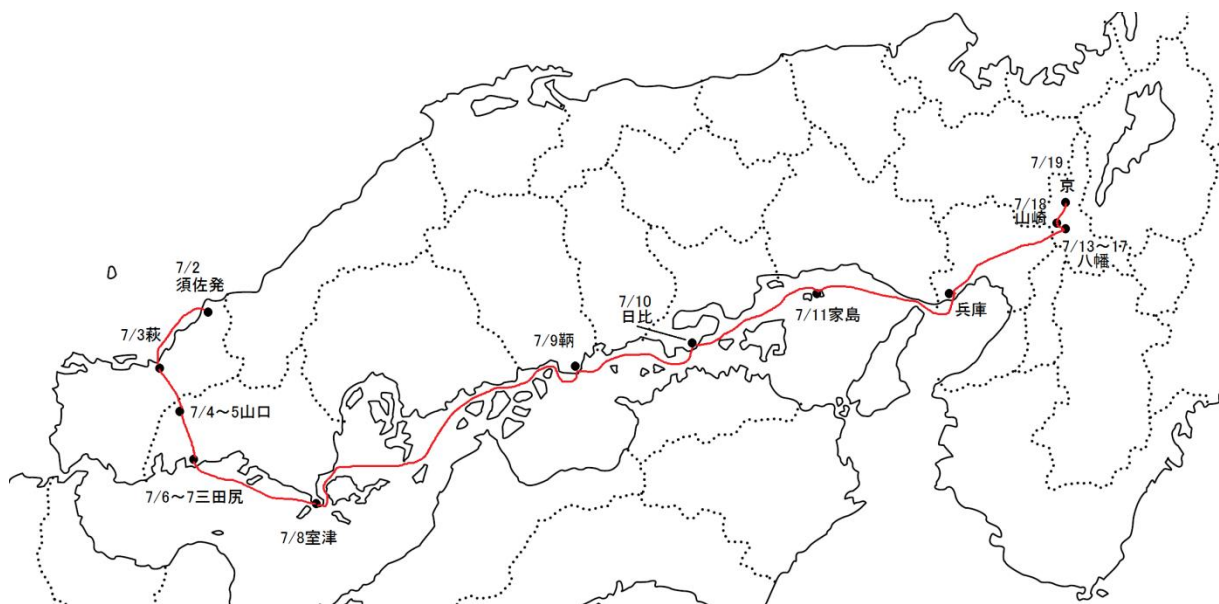
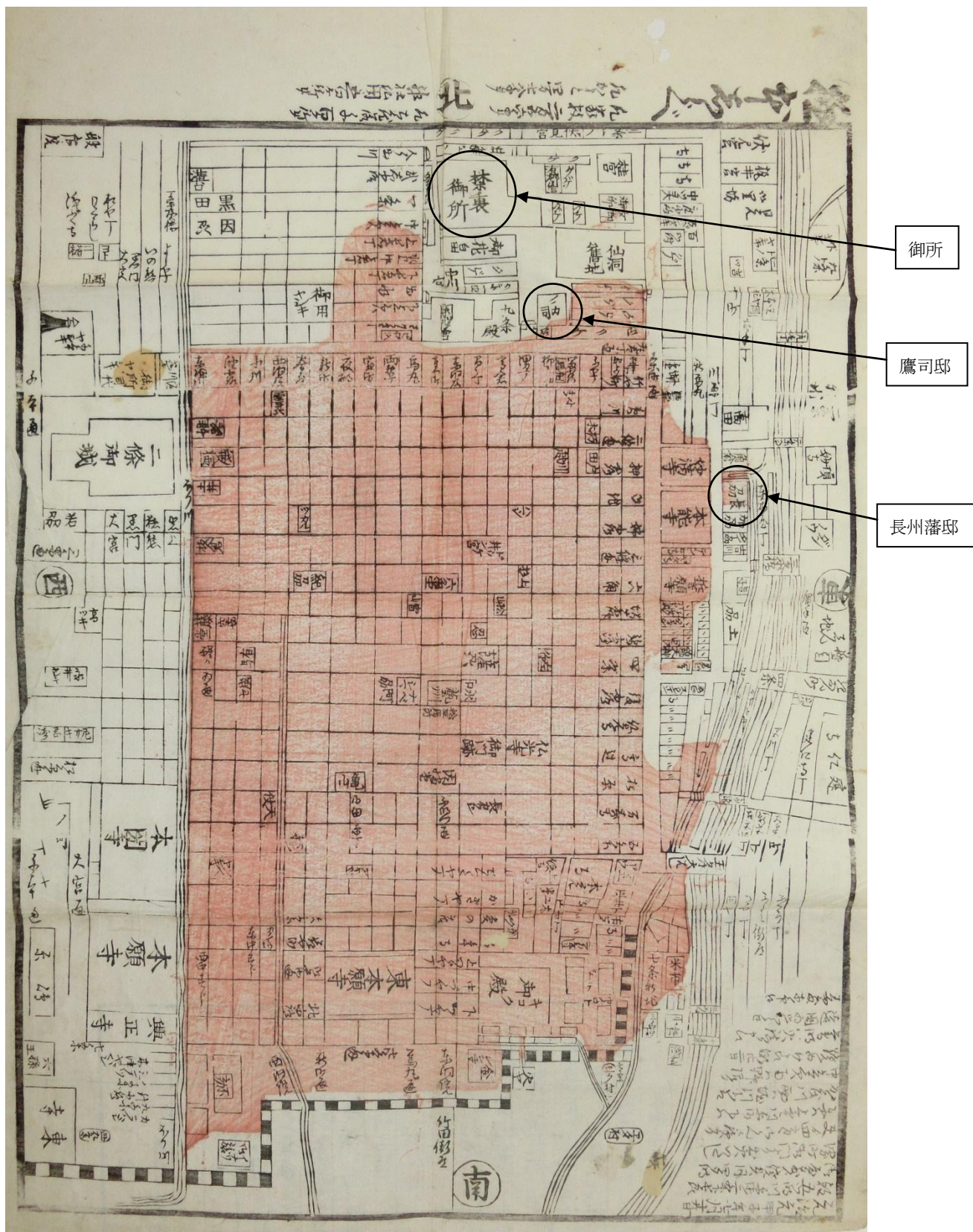


図1 「御進発道中日記其外小遣入用控」にみる益田隊の進軍経路（元治元年 7/2～7/19）



図2 「御進発道中日記其外小遣入用控」にみる益田隊の撤退経路（元治元年 7/19～7/23）

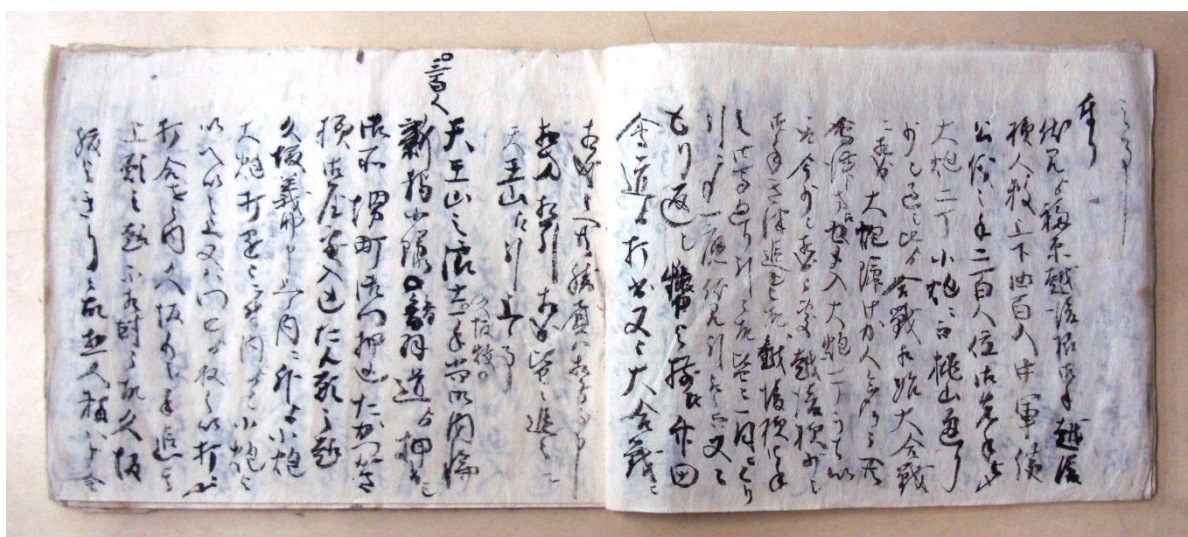


「京師變動京都市街焼失図」(毛利家文庫 58 絵図 157)

禁門の変で焼失した地区を示した絵図。変の後に出版されたもの。

凡例

- 一、当史料は、平成27年度、山口県文書館古文書解読自主グループ「けやきの会」が解読したものである。
- 一、漢字は、原則として常用漢字を使用した。
- 一、変体仮名及び慣用的合字は、「江」(え)、「而」(て)、「者」(は)を除いて、原則として平仮名に改めた。
- 一、適宜、読点および並列点を付した。
- 一、抹消部分は、原則として訂正部分をそのまま本文とした。
- 一、改行や割注は原則として原本のままとしたが、意味をとりやすくするため、改めた場合もある。
- 一、説明として加えた傍注は()で示した。
- 一、本文右上に小活字()書きで付した数字は、講座で用いたテキストの頁数を示している。頁の区切りには破線を入れた。



「御進発道中日記其外小遣入用控」の本文部分

久坂玄瑞が切腹したことを記す部分（左頁最後の部分）

御進發道中日記其外小遣入用控

① (表紙)

吉辰
御進發道中日記
其外小遺入用控
(二八六四)
元治元子六月廿四日
藤原致事所持

②

日記

元治元年
七月二日
須佐発

一 七月二日七ツ時揃場紹孝寺へ一応集
育英館目拝礼揃、薄より乗船、夜九ツ時
出帆之事、

七月三日
萩着

佐々並

一 同三日白九ツ時萩着船、保福寺ニ落付、
昼飯相認め、八ツ時萩出立、
(佐々並) 篠並ニ而夜ニ入
候事、

七月四日
山口真光院

一 同四日今朝五ツ時山口氷上山真光院江着、
滞留之事、

七月五日

七月六日

鯖山峠
三田尻

一 同五日氷上滞留之事
一 同六日八ツ半時氷上御発駕ニ而、六ツ時
鯖峠ニ而御小休、四ツ時三田尻御本陣、
五十君京四郎方御着、同所永見人
兵衛方下宿ニ相成止宿之事、

③

七月七日
乗船

七月八日
室津

七月九日
伊予風早
岩城湊

備後鞆の浦

七月十日
備前日比

七月十一日

小豆島馬越

播磨沖家島

七月十二日

七月十三日
兵庫着

大坂

京都

七月十四日

一 七日九ツ時御乗船ニ而御出帆之事、

一 八日六ツ時室津江着船上陸、湯へ入、
八ツ半時室津出帆之事、

一 九日朝五ツ時伊予かざは(風早)と申所江着、水
くみ参り、其レより伊予岩木之湊江
(岩城湊)

着、少休、其レより夜ニ入、九ツ時備後ノ鞆へ着、
船ニ而止宿、

一 十日昼後迄鞆ニ滞留、八ツ時出帆、
一 備前之日比と申所江夜六ツ半時着
ニ止宿之事

一 十一日今晚七ツ半時日比浦出帆、
讃州之小豆島馬越へと申浦江

九ツ時着船、上陸ニ而風呂へ入、
早刻乗船、七ツ時出船、夜七ツ
時播州之沖家島へ着船

一 十二日四ツ時家島出帆、播州
沖へ八ツ半時懸り、

一 十三日五ツ時兵庫着、陸へ上り所々
見物、九ツ乗船、九ツ時出帆、七ツ半
時大坂常安橋御蔵屋へ着ニ而

風呂江入、飯認め、夜ニ入、淀舟江乗
組、城州八幡江趣候事、

一 十四日九ツ時城州八幡領之内橋本

石清水八幡宮

と申所江着、上陸二而早刻出立、

八ツ半時城州石清水男山八幡

宮御山之内赤坊御本陣二相成、

御上二者赤坊へ御着、辻本坊戦士

隊之陣屋二相成、滞陣之事、

七月十五日

一十五日同所滞陣、今日保昌・多卯・
(保昌是左衛門) (多卯二)
(城一集雄) (仲井半四郎) (松本唯二) (松原勘助) (金子新蔵)
城隼・仲半・松唯・松齡・金新・

⁴
(松原茂一郎)
松茂八人江斥候之役被仰付、

申合せ近辺所々江張出、様子物聞

繕合帰り次第御直二申上候事、

七月十六日

一十六日同断、

七月十七日

一十七日同断、

七月十八日

一十八日同断、八ツ半時八幡出立

二而、城州山崎二而天王山江御出陣江、

天王山

七ツ半時天王山二而宝寺

御本陣二相成御着陣、夜入五ツ時、浪

士三百人、御内輪之儀ハ新狩備・(殿備)殿隊

合へ一小隊、浪士江相加り京都出

陣、残り人数之儀ハ天王山を相守

合戦開始

候処、夜九ツ時京都合戦始り、大砲

小砲音天王山より目之下相聞、大変

二相成候二付、斥候トシテ鳥羽口・伏見口へ

七月十九日

度々出張いたし候事、

一十九日九ツ時二合戦治り、勝負

ハ相分不申、相引二而

手追其惣人数追々天王山江

引取候二付、此上天王山へ京

都勢せめかゝり、火をかけ

候様子二相聞候故、引上相定、

早速天王山物勢御内輪

皆々引払之道中無難、尤

退却

西ノ宮江播州姫路酒井雅楽守(頭)

より堅めトシテ三百人位弓銃ニシテ出張

仕候処、長州と申而ハ一向ニ通せ

不申二付、因州と申立無難

二而罷通り、(播州)摂州兵庫江

八ツ時無難二而着、其より乗船

二而御国之室津廿四日之朝着

室津着

之事、

付り、

福原越後隊

伏見より福原越後様御手、越後

様人数上下四百人中軍備

公儀之手二百人位御先手トシテ

大砲二丁、小砲二而桃山通り

少し過し比より合戦相始、大合戦

(怪我)

二相成、大炮隊けか人多ク候へ共、

(奪い)

会津方江セメ入、大炮二丁うはい

取、今少し相成候処、越後様少し

御手きつ追レ候故、越後様御手

之御馬廻り引候故、皆々一同二くり

引ニシテ一応伏見引取候而、又々

もり返し勢を揃江、竹田

会道より打出、又々大合戦ニ

相成候へ共、勝負ハ相分不申、

相方相引相成、皆々追々ニ

天王山江引上候事、

(真木)

天王山之浪士久坂・牧一手、尚御内輪

(鷹)

新狩小隊三百人鳥羽道より押出シ、

(鷹司)

御所堺町御門押込、たかつかさ

様御屋敷入込、たん願之趣

久坂義助申上候内ニ、外より小炮

大炮打懸候二付、内よりも小炮を

以へい之上又ハ門口よりねらい打ニシテ

打合せ候内、久坂少し手追、其

(手追)

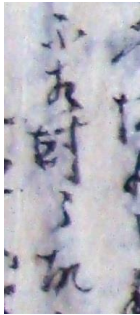
上願之趣不相尅候故、久坂

腹をきり候故、惣人数ハ申合

久坂切腹

鷹司邸

久坂玄瑞
真木和泉



(6)

一同二門外江打出、大炮小炮

一同二はなし、寄手追ちらし、

惣人数懸出シ、皆々ちりぐく

相成、天王山差引取候、勝負

前二同断

天龍寺国司・来島一手五百人蛤御門

江打入、合戦及ひ候処、来島

打死二相成、跡只様打相戦

候へ共、早々二大将被打レ候故、此

手くすれ皆々天龍寺江

帰り、其より天王山差而惣人

数追々引取候事、

京都方も御屋敷大仏

其外伏見錢屋之方江火を

懸、追々大火二相成、京・伏見辺

不残やけ候様二被相考候

付り、

十八日夜七ツ時やけ出シ、廿一日之朝

迄も播州沖より火之手相見候事、

右何レも手追ハ大分有之

候へ共、即死ハ少シ之事、

右何レも一応天王山江揃候へ共、

人数皆々相揃見候処、都々千

国司信濃隊

来島又兵衛
戦死

京都戦況

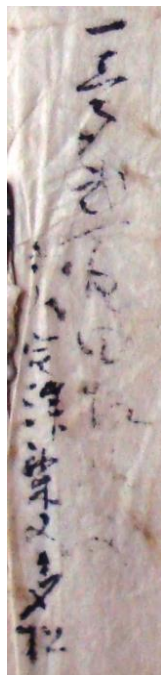
同 三十四文	同、多卯一、 (焼酎) しうちう
同 一十三文	同、火打
同 同十日 一百六十文	軋二而砂糖四半斤
一式十文	同、黒保代
同 一三三文	同、参銭 (兼銭)
同 一十九文	同、風呂貸 (賃)
同 一五拾壹文 同十一日	肴代
同 一三拾貳文 同十三日	讃州小豆島、水瓜
同 一貳百八文	兵庫酒出銅
同 一貳拾五文 同十四日	同、茶代
同 一三拾九文	(淀川) よと川
同 一五拾八文	山城八幡宮二而草りわらす
同 一三拾七文 同十五日	同橋本二而茶代
同 一三二文 同十六日	(石清水) 岩清水八幡宮江参銭
同 一三二文	同断
同 一十四文	八幡二而茶代
同 一百九拾貳文	橋本二飯代
同 一貳拾貳文	(桶栗カ) 久次輪二而茶代
同 一七拾文 同十七日	橋本二而水瓜代
同 一六拾四文	白津之金之下帯
同 ^⑩ 一十四文 同十八日	酒代
同 一八拾六文	同
同 一百文	矢除御守

同 一十貳文	開運御守
同 一五文	参銭
同 一貳十四文 同十九日	料理代
同 一百八拾壹文 同廿日	城州山科天王山二而出銅
同 一百十六文	兵庫二而
一六十四文 同廿二日	西宮二而
同 一十六文 同廿四日	船酒肴
同 一五拾六文 同廿五日	室津波田へ酒代
同 一九十一文 同廿五日	室津酒、松本氏へ
同 一百壹文	同、松原平へ
同 一三十文	煙草代
同 一五十文 同廿六日	茶口代
同 一三十三文 同廿六日	かみゆい貸 (賃)
同 一十一文 同廿八日	茶口
同 一三十六文	(マゴ) 鯖峠茶口
同 一九十五文	富海酒出銅
一四十五文	山口茶口
一十九文	おしろい
一四百九十五文	小共帯
一壹、六百九十貳文	大人帯
一百貳十文	筆四
一三百六十三文	末広一
一六十三文	ひん付

⑪
一七百三十六文
木り緒雪駄

⑫
一金壺歩
一金三歩壺朱
一同壺両
一同壺歩
一同式歩
一銀四
一式朱
家
家
寺
山口藤
動
田
心

⑬
一壺ノ式百四拾八文
(*該部写真参照)
□□□津栗又多松



(終)